

# 聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

## 巻頭言

### 「みことばの深みを求め続ける<sup>まなびや</sup>学舎」

清瀬福音自由教会牧師

岩井 基 雄<sup>もと お</sup>

「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることの無い働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」(II テモテ 2:15)

浜田山の古い校舎で入学を許され、在学中に移転した羽村の校舎から教会へと遣わされて20年が経過した。みことばの深みと教会形成・宣教へのスピリットを多くの先生方から学んだ。その恩師の多くが天へと凱旋される中、与えられた恵みを振り返り、原点に戻ることの重要性を痛感している。

聖書宣教会での学びを一言で言うならば、「神を恐れる」学びであった。みことばに示された神の主権の前に、自らの無知・無力さと頑なさを問われ、主の恵みへと向かわせられる。原語の学びの困難さに苦闘しながらも、真理のみことばをまっすぐに説き明かす者としての特権を覚え、学びを続けさせていただいた。自らの弱さを隠さず、しかし神を恐れ、神の臨在の前に立つ先生方の姿に、全人格的な学びを与えられてきたことを感謝したい。

主の教会に仕える中で、みことばを「まっすぐに説き明かす」ことの困難さと向き合い続けている。語る者自身の抱える限界、そして伝える対象としての人々の状況や心の状態に左右されやすい現実の中で、みことばの真理に自ら生かされ、それをまっすぐに説き明かすことの重要性を痛感するからだ。パウロがテモテに書き送っているこの箇所も、初代教会の混乱、またテモテ自身の未熟さを踏まえてのチャレンジである。主の恵みに生かされることが強調され(2:1)、使命を分かち合う交わり、自らを律する姿勢も示され(:2-6)、しかし自分の限界にではなく主の真実に生かされることが語られている(:7-13)。状況や語る者の未熟さに左右されずに、まっすぐに説き明かされるべき「みことば」、何によってもつなげられることの無い真理(:9)

をとりつぐ者としての特権と責任をパウロは強調している(:14-26)。今の時代多くの人が孤立し、家族や教会の中にあっても傷つき心を病む。生きにくい時代であり、慰めや愛が本当に重要である。

しかし、だからこそみことばがまっすぐに語られる必要がある。神のことばに慰めがあり、戒めがあり、愛があるからだ。

この三年間評議員の一人として、また三年前より夏期研修講座に参加させていただき、また約十年間教会で奉仕神学生に助けていただいた牧師として、この学舎の学びの深さと、主を恐れる姿勢には深く教えられる。私自身、主と教会に仕え様々な挫折を経験し、多くの失敗をも重ねてきた。しかし主のみことばに聴き、問われ続け、分かち合うことの素晴らしさも同時に教えられ続けてきた。そして、祈りとみことばによってこそ主の教会は建てあげられていくことを実感している。

今、新しい聖書翻訳の働きが諸教会の祈りの中で進められていることは感謝だ。みことばに忠実なそして正確な翻訳がベースになれば、正しく説き明かすことの困難は深まる。原語の豊かさをどう日本語とするのか非常に楽しみである。正しい解釈へと向かわしめる聖書翻訳の働きのために心から祈り、主の教会の働きとして共に支えていきたい。

この時代において、人の心を理解しつつ、みことばの釈義とその奥にある深みを求め、真摯に主を恐れ、みことばと格闘し続ける学舎の存在はどれほど重要かと思わされる。宣教のスピリットを失わず、神と人を愛し、教会に仕える学舎を心から感謝し、さらなる祝福を祈っていきたく願っている。





## 「礎はキリスト」－舟喜順一先生の思い出－

津村俊夫

聖書宣教会の建物には舟喜順一先生直筆の「礎はキリスト」という碑銘がはめ込まれています。1989年羽村に新校舎が与えられた時、先生はこの聖書のことばを記されました。私は先生が「これからも、何もないと思って進んで行ってください」と仰ったことが忘れられません。浜田山時代と比べると、教室も図書室も事務所もすべてが整い、学生数も増え卒業生が500名に近づいていました。いつの間にか見えるものに拠り頼み、人の援助に期待して大きな失敗をしてしまった宣教会でした。あの時の順一先生の言葉の意味をあらためて噛みしめました。「何もないと思って、キリストを礎として進んで行ってください」。

私が先生の後任として新改訳聖書刊行会の責任を執ることになった2003年1月、先生はただ「聖書信仰を大切に守って行ってください」と仰いました。それ以外は、組織を守りなさいとか人間関係を大事にしなさいとか、そういうことは一切仰いませんでした。2005年3月に私が急遽教師会議長を引き受けることになった時も、ただ「祈っています」と仰るだけでしたが、先生の存在そのものが私にとって大きな励ましでした。みことばの確かさと豊かさ、それを神学舎の授業を通して、「みことばの光」の編集を通して、新改訳聖書の翻訳の業を通して、身をもってあかしされたのが先生のご生涯だったと思います。

先生は、教会の内外において、この世と妥協しないで頑固に筋を通し、世の力と正面から対決して来られました。柔和で穏やかなそのご人格から、意固地と思われるほどに「聖書信仰」に堅く立たれた舟喜先生の姿勢に時には圧倒され、時には反発を覚え、しかし結果的に納得させられてきたことを今あらためて思い出しています。ある時先生は、ご自身米国でもっと深く学びたいという願いがあったと述懐しておられましたが、当時の日本の教会の必要を優先して帰って来てくださいました。先生はこの点においても主の御心に従って尊い犠牲となってくださったのでし

た。

私は順一先生から、誰よりも多くの時間を頂いて個人的な教えを受けた者ではなかったかと思います。神学舎で、浜田山教会で、椅子に座ると話しが長引くので立ったままお話している内に、いつの間にか3時間も話し続けているような時がしばしばありました。そのおかげで脚力がつきましたが。内容は様々で、神学校の問題から聖書学の方法論、神学、福音派内外の状況、社会問題、個人的問題に至るまで色々でした。すべての事柄において先生は「みことばに仕える」しもべの姿を見せてくださいました。

舟喜順一先生は、40歳台の1960年代初めから70年の出版まで、新改訳聖書の翻訳編集のために労され、91年からの5年間、著作権確認訴訟において、いのちを削るようにして新改訳聖書を守ってくださいました。外国からの商業的圧力から新改訳聖書の著作権を守るために、心血を注いで戦われた舟喜順一先生のご労苦を思わずにはおれません。

その頃、新改訳聖書の使命がもう終わったかのような動きに対して、先生は大変こころを痛め身体的にも限界に来ておられました。そして2003年理事長を退かれました。先生はその一年前から私たちに分厚い資料のコピーをいくつも託されました。そのおかげで、理事たちが力を合わせ、主に拠り頼みながら困難な諸局面を乗り越えることが出来ました。この度、摂理の主の導きにより、新日本聖書刊行会という新たな装いをもって、出版社から独立した著作権を持つ翻訳団体として、新改訳聖書の改訂作業を諸教会の祈りと協力の下で始められるようになったことの歴史的意味は大きいと思います。

多くの患難の中で、忍耐と愛をもって勇敢に歩まれた舟喜順一先生。今は「走るべき道のりを走り終え」て主の御前に安んじておられることと思います。主が順一先生をお用いになって、戦後60年の日本の教会のために大きな業をなしてくださったことの故に、心から主の御名をあがめる者です。



## 「舟喜順一先生の思い出」

### 「思い出すままに」

松本任弘

神学序論の時間、先生は聖書と共に他の分野の本、例えば科学雑誌「自然」などを持ってこられた。この世の考え方が聖書から見てどうなのか、この世の諸現象、もろもろの解釈をキリスト者として聖書からどう見るべきなのか、いつも問い続けておられた。

序論でしばしば問題になったのが神学の前提。中学の時、公理に基づく幾何の論理に大変興味を持たれた由。公理（前提）に基づく論理は神学に大変有効だと言っておられた。聖書神学の前提はまず聖書の靈感と啓示。また三位一体の神も聖書にかく記されている故、そのまま受け入れるべし。曰く。それを概念の類比で何とか説明しようとしても、やがてスコラ哲学の存在の類比（analogia entis）に墮してしまう。

ビルマ従軍の折、周りの様子を探るべく小高い場所に立ち、周囲を見渡した。そこに大きな錦蛇がとぐろを巻いてこちらを睨んでいた。危ない。その時ロマ書8章22節の「自然のうめき」を痛感された。

曰く。聖書のことばを易しいと想うな。字句の上では容易でも我ら罪人にはなお難しい。みことばの実を結ぶには聖霊の働きが不可欠。

先生が隣人を助けるのに人知れず苦しんでいる、と身内の人から幾度か耳にした。先生の“神学する”営みは実に実践的、伝道的であったと思う。

### 「人生の里程標のごとくに」

内田和彦

舟喜順一先生の講演を初めて伺ったのは大学2年生の時、浦和福音自由教会の青年会の「結婚セミナー」でした。その3年後には、献身について相談に乗っていただきました。

神学舎に入学した年、大学でギリシャ語を学んでいた私は、新約聖書速読コースを設けていただきました。卒業後には、牧会をしながら教鞭をとる機会を与えていただきました。「聖書学はイギリスで学べるといいですね」という言葉が、数年後に実現しました。結婚の時には御夫妻が証人となり、祝福してくださいました。留学中お便りはほとんど一方通行でしたが、先生の僅かな言葉に、帰国を待っていてくださることが感じられました。5年ぶりに帰国すると新約釈義のクラスが待っていました。10年後、専任教師になり羽村に引越した日、先生はいそいそと荷物を運んでくださいました。18年後、前橋での牧会が決まった時、嬉しそうに手を差し出しておっしゃいました。「私の母教会に行ってくれて有り難う。」一年の奉仕を終える頃、入院中の先生をお見舞いし、前橋の年報をお見せすると、先生はそれを食い入るように見ながら、教会の近況を次々とお尋ねになったのです。

振り返れば、私の人生の里程標のように、先生が微笑みながら立っておられました。

### 「真実な礼拝者であった順一先生」

奥田健一

神学生時代、私にとって順一先生は何より偉大な教師でした。講義を通して、聖書信仰とは何かを3年かけて教えて（悟らせて？）いただきました。

卒業して10年後、不思議な主の導きにより浜田山教会で奉仕することになりました。

するとそこに順一先生ご夫妻が礼拝者としておられました。驚くとともに、少し恐れました。先生からお借りしたアインシュタインの相対性理論に関する本(!)をお返ししないのでした。先生は、毎週欠かさずことなく喜んで礼拝に出席されていました。説教の時、かつての授業の初めの祈りのようなお顔で静かにみことばに耳を傾けておられました。天に召されたその週の礼拝にも、いつもの席に座って礼拝をささげました。その日は召天者記念礼拝で、舟喜信先生の名を読み上げたとき、関係者として奥様とともにゆっくりと立ち上がられた姿が私の目に焼き付いています。

ある方から、偉大な先生がいて説教をするのは大変ではないですかという趣旨の質問をされたことがあります。しかし、私にとって、先生は最良の説教の聴き手でした。人間的な偉大さを超えて、一人の真実な礼拝者を見たからです。兄弟姉妹たちとともに主と主のことばを単純に喜ぶ姿は、教会と私にとって大切な見本でした。特別な恵みを主に感謝しています。

2010年度 新入会生



後列左より、若林、鈴木、林、原田、竹内、大高、野村 前列左より、香川、本屋敷、久島、野口、姜、菊池

氏名 出身教会 奉仕教会

(聖書神学舎本科) [12名]

大高伊作	清瀬バプテスト教会 (日本バプテスト教会連合)	清瀬バプテスト教会
香川直樹	奥多摩福音キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)	奥多摩福音キリスト教会
姜明善	草梁教会 (大韓イエス教長老会)	中野教会
久島香子	矢吹聖書キリスト教会 (単立)	松見ヶ丘キリスト教会
鈴木俊見	浦和福音自由教会 (日本福音自由教会協議会)	立川福音自由教会
竹内義孝	東村山キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)	東村山キリスト教会
野口彩夏	博多キリスト教 (日本バプテスト連盟)	浜田山キリスト教会
野村天路	香住丘キリスト福音教会 (九州キリスト福音フェローシップ)	生田丘の上キリスト教会
林武志	いのちの樹教会 (日本同盟基督教団)	いのちの樹教会
原田航海	横浜緑園キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)	横浜緑園キリスト教会
本屋敷一彦	仙台福音自由教会 (日本福音自由教会協議会)	東京武蔵野福音自由教会
若林義也	沼津港町教会 (単立)	沼津港町教会

(聖書神学舎聖書科・聖書専攻) [1名]

菊池守	ぶどうの樹聖書教会 (単立)	水戸第一聖書バプテスト教会
-----	----------------	---------------

・・・新入生のあかし・・

「主にのみ頼って」

大高伊作

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」(マルコ 1:17) このみことばが私に迫りました。

社会人として働き始めて二年が過ぎた頃から、会社で行う仕事に対して疑問をもち、私はこのまま仕事を続けていって良いのかと考え始めました。それから牧師先生の勧めもあって一年間祈り、冒頭のみことばが与えられて、この聖書神学舎へと導かれました。

私には全くと言って良いほど特別な能力はありません。あるのは、人の救いのために一生を献げるという思いだけです。英語の苦手な私がギリシャ語とヘブル語を学ぶのは、相当な冒険です。人間的に考えれば不可能なようにも感じます。しかし、主に不可能なことはありません。「必要な知識を、必要な時に、必要なだけ下さる」と信じて主に期待します。

主からお力を頂き、人間をとる漁師になれるよう訓練に励んでいきたいと思います。

「深みに漕ぎ出して」

久島香子

私はクリスチャンホームに育ち、教会を離れたことはありませんでした。しかし、みことばに触れていくにつれ、自分がイエス様に喜ばれる生き方とは正反対の道を歩んでいるような心の責めを感じ始めました。表向きは忠実に礼拝を守っているように見えても、心の思いはいつも自分が中心でした。けれども、礼拝のみことばを通して神様は私に悔い改めるチャンスと罪の赦しを下さいました。

その後、神様から示されたのは聖書宣教会での学びでした。「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」(ルカ 5:4) のみことばを召しとして受け取りました。主に贖われた者として、畏れと喜びをもって主に仕えていきたいと祈っています。



後列左より、芳田、竹元、神田、正村  
前列左より、滝野、田村、吉永

氏 名 奉 仕 先

(聖書神学舎本科卒業) [7名]

神 田 <sup>ただ</sup> 唯 <sup>し</sup> 志 <sup>し</sup>	武 蔵 <sup>む</sup> 台 <sup>さし</sup> キ <sup>だい</sup> リ <sup>だい</sup> ス <sup>だい</sup> ト <sup>だい</sup> 福 音 教 会 (日本福音キリスト教会連合)
正 村 <sup>けん</sup> 献 <sup>けん</sup> 三 <sup>さん</sup>	生 駒 <sup>ま</sup> め <sup>こ</sup> め <sup>ま</sup> ぐ <sup>ぐ</sup> み 教 会 (日本同盟基督教団)
竹 元 <sup>たけもと</sup> 献 <sup>けん</sup> 三 <sup>さん</sup>	岡 山 <sup>おかやま</sup> グ <sup>グ</sup> レ <sup>レ</sup> イ <sup>イ</sup> ス <sup>ス</sup> チ <sup>チ</sup> ャ <sup>ャ</sup> ー <sup>ー</sup> チ (日本同盟基督教団)
田 村 <sup>たむら</sup> 尚 <sup>なお</sup> 美 <sup>み</sup>	中 野 <sup>なかの</sup> 教 会 (日本同盟基督教団)
芳 田 <sup>よしだ</sup> 秀 <sup>ひで</sup> 貴 <sup>たか</sup>	(留 学 準 備 中)
吉 永 <sup>よしなが</sup> 沙 <sup>さ</sup> 織 <sup>おり</sup>	前 橋 <sup>まへはし</sup> キ <sup>キ</sup> リ <sup>リ</sup> ス <sup>ス</sup> ト 教 会 (日本福音キリスト教会連合)
滝 野 <sup>たきの</sup> 賀 <sup>か</sup> 代 <sup>だい</sup>	浜 田 <sup>はまた</sup> 山 <sup>やま</sup> キ <sup>キ</sup> リ <sup>リ</sup> ス <sup>ス</sup> ト 教 会 (日本福音キリスト教会連合)

… 卒業生のあかし ……………

「主の御声を伝える者として」

神 田 唯 志

私にとって、この四年間を一文字で表現するとしたら「声」です。意外なタイミングで主のみ声に導かれ、以前の職場を離れてここに来ました。そしてこの学び舎で主の御声をどのように聞き、どのように伝えるかを学んで来ました。聖書のみことばを原語で読み解くことや、日常生活を通して主の御声に聞き従うことを学び、説教演習等を通して主の御声を伝えることを学びました。特に、教会音楽実習やキャラバン伝道、奉仕教会の説教奉仕を通して、私自身の課題であった明瞭な声を出す訓練の機会が備えられていたことは幸いでした。

ここから出て行くことには、期待とともに不安もあります。しかし、主の御声に従い続ける限り主が備えをしてくださることも、この四年間で経験させられたことです。祈りとささげ物をもってご支援くださった教会の皆様にも感謝しています。これからは、人々の声に耳を傾けつつ、主の御声を伝える者としての歩みが始まります。

「聖書宣教会での学び」

正 村 献 三

聖書宣教会での学びを通して、聖書のみことばのもつ深み、豊かさに感動し、みことばが本当に、信頼に値するものであることを教えられました。同時に、学べば学ぶほど分からないことに直面し、学び続けることの大切さを痛感しています。4年間の学びは、困難を覚えることも多かったのですが、多くの方々の祈り、そして何よりも主のあわれみがあったからこそ、学びを続けることができたのだと感謝しています。聖書宣教会で学んだことを基礎に、いつも新しい思いをもって、謙虚に学び続ける者でありたいと願っています。

卒業を迎えて、改めて感じていることは、自らが途上にあるということです。日々、みことばに教えられ、刷新され続けながら、奉仕者として成長させていただきたいと願っています。



## 「主の恵みと主権にゆだねて」

竹元 献

「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」(マタイ 28:18b-19a)

東京基督教大学の最終学年次の夏、私は海外宣教への志をすでに与えられていながらも、自らの汚れや弱さを覚え、また自らが牧会に従事することへの確信がなく、迷いの中にあった。しかし、上記のみことばから、すべてを主の主権にゆだねて、自らを主の働きにゆだねる祈りをした。その後、準備を進めていた教職への道は閉ざされ、代わりにこの聖書宣教会への入会へと導かれた。聖書宣教会での学びと訓練は厳しく、多くの困難や限界を覚えながらの歩みであった。しかし、すべてのことが私にとって必要な経験であり、主からの大切なとりあつかいのおかげであった事を覚え、心から主に感謝している。あらゆる面において、なお欠けだらけの身であるが、主の恵みと主権にゆだねて、これからの働きに遣わされていきたい。

## 「真実なる主によって」

田村(旧姓山口)尚美

「神様、聖書宣教会は厳しいと聞いています。何年かかるかわかりません。こんな私が卒業などできないと思います…」

入会前、ある年の“聖書宣教会通信”の卒業生のあかしを読みつつ、祈ったことを思い出す。確かに入会後の学びや生活の訓練は、どれも主との関係や人との関わりを探られるものだった。「何とかして大変さから抜け出したい」と、もがいている自分があることにも気づかされた。

4年間のなかで教えられたことのひとつを挙げるとするなら「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である」(II テモテ 2:13)ということ。自分の持てる何かによって認められようとする思いが見え隠れするかつての祈りを振り返る今、人の功績の結果ではなく、真実なる主によって卒業がゆるされたことを思う。

みことばにとどまり、主ご自身をこれからも知り続け、伝える歩みをさせていただきたい。主にあるみさまとの交わり、お祈りに心から感謝し、卒業のあかしをここに刻みます。

## 「みことばと現実」

芳田 秀貴

聖書宣教会での歩みを通して、特に「みことばに従う」とはどういうことかを考えさせられてきました。みことばには人間の罪、神のさばき、赦し、祝福の約束など多くのことが記されています。これらに耳を傾けつつ、みことばに従い続けるとはどういうことなのか。それは単にみことばを知識として知るだけのことでなく、常に私の現実の歩みがみことばによって指針を得、それに従っているのかということ厳しく問われるものでした。

その中で気づかされてきたことは、みことばにある当時の現実、現代の私の周りにおける現実でもあるということでした。みことばにある人の罪、神のさばき、そして赦し、祝福の約束、これらがまさに現実として私を取り囲んでいるのだということに改めて教えられました。

卒業後、この現実の中で決して変わらぬ主のみことばにすべての信頼を置き、「みことばを伝えなさい」という主の召しに生かされる者でありたいと願っています。

## 「主の御力と主権によって」

吉永(旧姓東)沙織

4年間の研修生活を支えてくださったあわれみの主と背後で祈り支えてくださった方々に心から感謝します。これまでの歩みを振り返り、思い起こすことは、「主が主権と御力をもって私たちをご自分のものにしようとしてくださっていること」を、身をもって体験させていただいたことです。研修生活のあらゆる面を通して、人間の罪深さともろさを知らされました。私自身が主のご支配を無視し、何かできる者かのように考えていた面もあります。「私たちには何もない。いやむしろ罪があるのだ」と思わされる中で、主はいつも「あなたはわたしに従うか」と、みことばをもって迫ってくださいました。不安を抱きながら一歩踏み出す中に、圧倒的な主の御力の現れがありました。「主よ。私のような者から離れてください」という者に、主はご主権を現してくださいました。

この主の御力と主権によって、主を告げ知らせる者としての生涯を歩ませて頂きたいと願います。

## 「主を見上げる歩み」

滝野 賀代

「主の望まれる器として整えられたい」と入会のあかしに書いた。どれだけ整えられたらだろうか。他の人を見て、自分の不甲斐なさに悲しくなったり、落ち込んだりした日々…。自分を見て、そのいい加減さや不信仰さのため息をつく日々…。そして状況を見て、恐れとまどう日々…。けれども、主は私の目を主に向けること、みことばが決して揺り動かされることのない真実なものであることを示してくださいました。

まだまだ揺るがされそうになるままで、教会に奉仕する者として送り出されるが、私自身には誇るものはほんのわずかもない。ただ主を愛し、信頼しつつ、「御霊と御力の現れ」としての宣教がなされるようにと祈らされている。どのような時であっても、みことばに堅く立って、主を見上げ続ける歩みでありたい。「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたのではなく、御霊と御力の現れでした。」(I コリント 2:4)

図書館の仕事は際限なくあります。一冊の本が整備されて書架に配置されるためには、本当に多くのなすべき作業があります。

(1) 選書・購入。

図書館に必要な書籍や情報がどのようなものであるのかを見定めて、書店からだけでなく、専門図書館のディーラーや出版社のホームページ、そして様々な図書ニュース、学術雑誌の書評などから必要な書籍を選びます。限られた予算の中で今この本を図書館のために購入すべきであるかを決めます。これが意外に大変な作業になります。次に、それらが図書館に既にあるかどうかをコンピュータでチェックしてから注文します。

(2) 登録。

本が到着しますと、著者名、書名、出版社、出版年、購入先などを図書原簿に登録します。

(3) 分類。

宣教会の図書館では、米国の神学校用に開発されたユニオン神学校図書分類システムを採用していますので、それに従って一冊ずつ分類します。現代の神学体系に合わない場合は新しい項目を追加します。一冊を分類するのに数分から30分程かかります。洋書の場合も内容を的確に把握して適切な所に分類するのです。語学力と共に、神学体系全体への理解が必要です。

(4) コンピュータ入力・配架。

書籍情報をデータベース化して、最後に、ラベルや貸出カード袋を貼り付けてから、一冊ずつ配架します。

このようにしてようやく一冊の本が利用者に用いていただけるようになります。図書館の働きには、多くの人の目に見えない側面があるのです。

近況と祈りの課題

- 聖書神学舎創立者のお一人であり、多年にわたって校長として学舎を導いてこられた舟喜順一先生が、4月13日に急逝なされて、主のみもとに移されました。89歳でした。梶子夫人とご遺族の上に主の慰めが豊かにありますように。
- 新入会生を迎えて数週間が過ぎました。学舎の歩みは落ち着きを得ています。各学年の学びと訓練、係活動や寮生活、教会奉仕などを通して、主が一人一人を最善に整えてくださいますように。
- 今夏の伝道実習は、神奈川県(2)、岐阜県、宮崎県の4つの教会に受け入れていただき、17名が奉仕します。各キャラバンチームの備えのために、主の助けをお祈りください。
- 夏期研修講座は、7月6～8日に「聖書に見る『霊』の働き」をテーマとして、また教会音楽夏期講習会は、7月29～31日に「みことばと音楽～礼拝と会衆賛美」というテーマで、それぞれ開催されます。参加者のため、また特に多用の中でなされる教師たちの準備のためお祈りを。
- 日本と世界の各地で主に仕えている卒業生兄弟姉のために。主に期待し、主に信頼して、みことばに忠実な奉仕を続けることができるように。
- 2009年度の決算が守られましたことを主に感謝しています。報告は別途にさせていただきます。今後とも、すべての必要を、主ご自身が満たしてくださいますように。

編集後記 .....

またおひとり、大切な主の器がみもとに移されました。聖書神学舎に、また日本の教会の聖書信仰の歩みに、かけがえのない貢献を主がなさせてくださったこの器とのひとときの離別に、喪失感を禁じません。

.....

徹底してみことばに聴き、みことばに立つことを教えていただいたことを大切に覚えて、主のわざに励んでまいります。(A)